

ロベルト・ジョビーの  
カード・カレッジ  
第5巻



ロベルト・ジョビーの  
カード・カレッジ  
第5巻

イラスト  
バーバラ・ジョビー＝エブノザール

著  
ロベルト・ジョビー

訳  
星野泰佑

# THANKS!

次の方々に改めて感謝します。彼女たちなしでは、この『カード・カレッジ』の5巻は生まれなかったでしょう。

今回も、そしてこれからもまず第一に、妻であり有能な同僚でもあるバーバラに感謝します。彼女の批評・提案・忍耐、そして数百点の挿絵が無ければ『カード・カレッジ』の存在は無かったでしょう。

次に出版者のスティーブン・ミンチ（と、Hermetic Press, Inc.）。そして、歴史的な部分に関する詳しい引用についてはマックス・メイビン、ミルト・コート、ハーベイ・ローゼンタール、スティーブ・ドラウンらが、その優れた能力で常に迅速に快く協力してくれました。

そしてエズラ・タウィルにも感謝を。この本の文章における僅かな不備は、彼の鋭い目と専門知識を掻い潜ったということでしょう。

最後に、存命の方も亡くなってしまった方もいますが、その名前と作品で本書のページを彩ってくれた、世界中のマジックの同業者全てに5度目の感謝の意を表します。

No part of this publication may be reproduced or transmitted in any form or by any means electronic, mechanical, photocopying, including photocopy, recording or any information storage and retrieval system now known or to be invented, without permission in writing from the publishers.

# 目次

序文	9
イントロダクション	11
<b>第 55 章：その他の技法</b>	<b>15</b>
Versatile Jokers	17
特別なカードの追加、抜き取り	17
ジョーカーと特別なカードをケースに入れた状態から始める	19
仕掛けのあるジョーカー	20
ジョーカーと簡単なセットアップ	21
ジョーカーを使ったトリック	22
Three-card Monte	22
Twin Fools	22
The Charlier Shuffle	30
The Overhand Lift Shuffle Run-up	33
On the Red-black Overhand Shuffle	40
The Overhand Shuffle Glimpse	43
The Gamblers' Bottom-card Glimpse	44
Secret Setup	45
Double Turnover from a Spread in the Hands	51
The Snap-over Color Change	55
Obtaining a Duplicate of a Spectator's Signature	56
<b>第 56 章：スターティング・イージー</b>	<b>61</b>
A Psychological Test	63
Strange Harmony	71
Affinity in Numbers	79
The Happy Birthday Card Trick	83
<b>第 57 章：クイック・エフェクト</b>	<b>87</b>
The Quick-change Artists	89
Countdown Stop	96
Pasteboard Blendo	102
Coalaces	107
<b>第 58 章：エース・オーバーチュア</b>	<b>111</b>
Thompson's Aces	113
How Lucky Can You Get?	119
The Cards of Destiny	124
Sign of Four	132
<b>第 59 章：フォー・フォア・ジ・エース</b>	<b>139</b>
Study for Four Aces	141
The Joker is a Diakka	154
The Knowledgeable Cards	168

Slow Henry	174
<b>第 60 章：ファーム・フェイバリット</b>	187
The History of Playing Cards	189
The Homesick Jesters	198
The Endless Loop	208
Stop!	216
<b>第 61 章：ギャンブル</b>	225
Fantasia at the Card Table	227
The Poker Player's Royal Flush	243
Poker Burn	249
<b>第 62 章：メンタル・エフェクト</b>	255
Insured Prediction	257
Mind- and Sightless	265
Telekinesis	274
<b>第 63 章：カード &amp; CO.</b>	279
The Color-changing Deck	281
SuperLative Lover	293
The Joker Folds Up	298
All's Wells That Ends Wells	312
On the LePaul Envelope Set	318
Wallet Bound	326
<b>第 64 章：カードマンズ・ユーモア</b>	335
Lines and Bits:	337
Humorous and Practical	337
Humor for Various Situations	340
Bibliographic Notes	351

本書を亡き両親、  
マリア・チェーザレ、オreste・チェーザレに捧げます。  
その恩は語り尽くせません。





# 序文

ジョン・カーニー

2003 年度カード・カレッジ卒業式 式辞

私たちは生涯にわたり、沢山の授業を受けています。その範囲は、まっすぐ立って歩くといった最も基本的な授業から、人間関係・経済・自己啓発の問題といった、より複雑なものにまで及びます。その道のどこかでは、私たちはカード・トリックのように何か平凡なものを学びたいことさえあるかもしれません。私のアドバイスはそれら全ての趣味に通用するものでしょう。

1. 教師は賢く選ぶこと。偶然出会った最初の“師匠”を神格化するのは愚かというものです。今までに一度も火を見たことがない人生を想像してください。そして初めてマッチに火を点してみせた人を崇拝するところを想像するのです！ おそらく、私たちが引き継げるものの限界はその秘密と同じ程度にとどまることでしょう。様々な様式や手段を学び、異なる視点を重視し、情報に基づいた選択を自身で下すことが、私たちに最善をもたらしてくれるのです。最も良い教師とは生徒です。ある者は答えを探し続け、ある者はノートを取り、実験をして、他の誰も思い付かないような質問を投げかけてくるのです。
2. 自分は生徒であるという気持ちでいること。ただ漫然と座して、教師や“指導してくれる”ような本に期待してはいけません。質問をして、検証をして、ノートを取って学ぶことを義務にしなければなりません。私たちは自分自身に挑戦して、自らの宿題をこなさなければなりません。問題を見つけ出し、欠点を取り除き、最も洗練された結果のみを残すのが真の生徒なのです。
3. 多くの失敗をする自分を許すこと——一旦は。完璧というのは無理がある目標です。それよりも着実な向上のために懸命に努力するべきです。昨日よりも少しでも良くなるように、完璧という目標に向けて日々少しずつ進んでいくのです。完璧と呼べる場所へたどり着く事は決まっていなくても、ひたむきな努力によってその甘い香りを嗅げる場所までは近づくことができるかもしれません。芸術の女神を信じる勇気も得られ、自らの些細な事柄が私たちの行動の全てに影響を及ぼすはずで。芸術の要素とは細部にあります。それらもまた、私たちの興味や好奇心を維持し続けるものなのです。

4. 忍耐強くあること。時間を掛けず、試行錯誤も無い学習には何の意味もありません。理解度とは少しずつ増していくものです。言語における複雑かつ繊細な理解力を例にとると、私たちはまずアルファベットを学び、次に単語、文、そして段落へと進んでいきます。単語の選び方、順序、語形変化によって組まれる文脈によって、意味がどのように変わるのかを学びます。ついには、複雑で抽象的な概念を受け取ったり、やりとりする方法をも学びます。それは、シェイクスピアによるソネットにうたわれた愛や、スタインベックの小説に登場する人間の条件にまつわる悲劇、エルヴィス・コステロの歌詞から漂う生々しいエネルギーなどです。これらの鮮やかでユニークな表現は、理解力の増加と多大な努力無しには創られ得なかったでしょう。

母乳のように溢れる技術や知識とともに、全ての物事を自分の物にしなければならぬと思ってしまうのが私たちの未熟な点です。初めの数日、数週、数ヶ月では物にならなかったというだけで、それは私たちに能力が無いことを意味するものではありません。更に頑張るべきだというだけなのです。

良い報せがあります。あなたは私の良き友人であるロベルト・ジョビーという、最高のクオリティの体現者と出会えた、ということです。彼の幅広い知識と行き届いた注意に裏打ちされた総合的な学習法は、素晴らしいカード・マジックに関する創作と演技の唯一にして最良の手助けとなっております。これまでのカード・カレッジで紹介されている授業を注意深く学んだ生徒は皆、達人の卵として本学を卒業することはまず間違いないでしょう。

2001年2月 スタジオシティにて

# イントロダクション

この類の本を読む人々は皆、どうにかしてマジックが上達したいと望んでいるのだと思う。もちろん私自身も例外ではない。バーゼル大学でフランス語学やフランス文学を学んでいた時のことを思い出す。教授はいつもこう言っていた。「フランス語の語学力を上達させたいなら、フランス語で物事を教えられるようになりなさい」

今、私は1冊の本を執筆している。これが初めての本ではないし、出版しているものは、マジックの授業とも呼ばれるようなものである。そして執筆をすることで、“私自身が”マジックについての勉強をしているのである。なぜなら、人に教えられるようになる前に、まず自分自身がマジックについて理解をしなくてはならないからだ。

私は、私達がどのようにして物事を学んでいくかについて研究したことがある。その結果、常に質が第一で、次に量だということが判った。決して逆ではない。これは何を意味するのだろうか？

例えば、レストランがたった1軒しかない小さな村に住んでいると想像してほしい。しかも、どんな理由かはさておき、週に5日はそのレストランで食事をしなくてはならない。そこのコックは料理が下手な上に、たった5種類しかレシピを知らない。あるとき突然、彼の目の前に妖精が現れ、そして次に挙げる2つの願いのうち1つを叶えるという。「メニューがよりバラエティー豊かになるように、新たに50種類のレシピを覚えることができるようにしてあげよう。でも、料理の腕前は今までと同じく下手なままだ。あるいは世界最高の調理技術と知識を与えてあげることもできる。そうすれば、今知っている5種類のレシピに関しては誰よりも上手く作れるようになる。さあ、どうする？」

あなたがどちらを選ぶか聞くことはしないが、“私の”選択ははっきりしている。後者を選ぶだろう。なぜなら、素晴らしい技術と知識が一度手に入ってしまうと、あとは数冊の料理本を買ってきて、本に載っている料理をその技術を用いて作ればいだけだからだ。そうすれば、料理の腕前とレシピの量という、両方の願いを共に叶えることができるだろう。しかし、逆を選択してしまえばそうはいかない。50種類のレシピを知ったところで、それらを上手く作るためのスキルが付いてくるわけではないからだ。

読者の中に“料理が下手なコック”がいる、ということを行っているわけではない。これは単に

たとえ話として持ち出ただけであり、本書や他の『カード・カレッジ』シリーズでは、技法や現象、面白い言い回しについてより多く学ぶことを主眼に置いているのではない、ということを書いたかったのである。もちろん、この本でも数多くの技法や現象や面白い言い回しについて目にするだろう——まさにそのための章も設けてある——が、本書や他のシリーズを執筆した主な理由、それは素晴らしいカード・マジックを作り上げる基本的な概念について議論し、そして実践するためなのだ。私はこれらの要素を構造化し、第4巻の最後に収録したマジック・ピラミッドというエッセイの中で体系化を試みた。ためらわずにもう一度その部分を読んでみてほしい。その内容が、この本の中で議論しようとしている事柄の参考となるからだ。

先の4冊の『カード・カレッジ』では、ヒューガードとブラウエが著した大変影響力のある書籍である『Royal Road to Card Magic』の方法を採用した。そして更に近年の学習方法も採用し、拡張した。しかし、まず技法のセクションがあり、それに続いてその技法を使った現象のセクションがある、というフォーマットには欠点がある。その手前までに学んだ材料しか使わないことで、たとえ素晴らしい現象であっても、ときに捻じ曲げられたり、無理な改変がなされたりする。ある現象を第1巻に載せる場合には、第1巻で学んだものしか使うことを許されないのだ。ポケット・スイッチがその現象における最善の方法だとしても、その技法の解説は第4巻まで登場しないのである。

幸運にも、このジレンマを感じ取られたり批判を頂戴したりしたことはほとんど無いが、これを解消することを、『カード・カレッジ 第5巻』のレゾンデートル (raison d'être : 存在理由) とした。本書は各種の材料——ほとんどは私のレパートリーである——をひとまとめにしたものである。それぞれの現象や手順は、最も直接的で洗練されていると私が思う手法を用いている。難しさの度合いは考えず、かつ教えるためだからという理由での制約も取り払った。なぜなら、それらに関する全ての手段や考え方は既に先の4冊の『カード・カレッジ』に載っているからである。そういった意味で、最高のカード・マジックの現象だと私が思っているものを教えるだけでなく、それを行うために最善の手段を構築する私の考え方も教えることができると確信している。

さて、ここに美味しそうな“カードの”ごちそうのメニューがある。始まりには、よくある問題をエレガントに解決する策略をいくつか——これらは、あなたの興味をそそるようなもの、フランス料理で言うところのアミューズ・ブーシュ (amuse bouch : 突き出し、お通し) だ。それに続くのは種類も量もたくさんの、カード・マジックの中でも最高の逸品揃いが8コース。そして最後には楽しいフリアンディーズ (friandises : お菓子) が饗される。その甘く美味しい魅惑の力で、どんな美食家の食事も、ユーモラスで、そしてじっくりと考えさせられるような時間のうちに締めくくられることだろう。理想的には、あなたは最後に完璧な満足感を得て、手品における最も知的な形であり、ホフジンサーが言うところの“奇術の詩”——すなわちカード・マジック——とともに過ごす一番楽しい時間の使い方について、深く考えを巡らすことができるようになるだろう。

これらの美味しく魅力的な、愛情を持って作られた多くの品々——願わくは、この素敵な10コー

スの食事が良きシェフによって振る舞われんことを。ボナペティ (Bon appétit : 召し上がれ)。

ロベルト・ジョビー  
2003年3月25日 ムッテンツにて



# 第 55 章

## その他の技法

“偉大な芸術家はささいな部分で評価される。”

アルトゥーロ・デ・アスカニオ







# Versatile Jokers

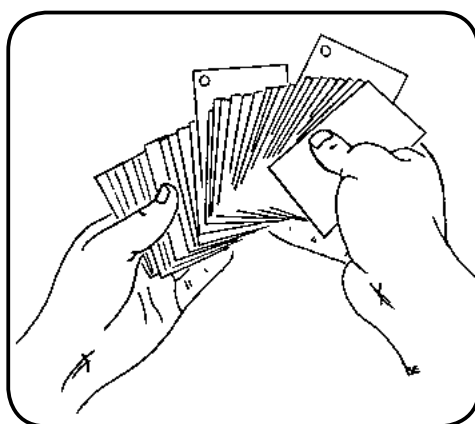
ここでは、2枚のジョーカーの一步進んだ様々な使い方について議論していく。このアイデアは、1枚もしくはそれ以上のデュプリケートやギミックカードのような特別なカードを付け加えたり取り除いたりする手助けを行う“世話役”として、デッキのジョーカーを使用するというものである。更には、ジョーカーそれ自体がギミックであってもよい。

この概念は大変用途が広いものなので、まずは基本的なアイデアを説明し、それからいくつかの応用について細かく説明しよう。更なる様々な使い道へと発展させることができるこれらのアイデアを皮切りに、最後にはジョーカーを使った素晴らしい現象を解説する。

## 特別なカードの追加、抜き取り

ここでいう特別なカードとは、デュプリケート・カードや、ダブルバック・ダブルフェイス・スプリットフェイスといったギャフカードのことである。2枚のダイヤの2をデュプリケートとして、とある奇跡のためにひそかにデッキのトップに付け加えてあったとしよう。今、ジョーカーを何かの口実によって取り除き、カードケースに入れようとしている。しかしこのとき、ジョーカーを“トロイの木馬”のように使い、トップにある2枚のデュプリケート・カードをこっそりとデッキから取り去るのだ。すぐに解るとおり、これを行うには様々な方法がある。しかし、私は2種類の方法だけに限定して述べることにする。1つは技術的に高度だが、洗練されているもの。もう1つは前者に比べると洗練の度合いはやや劣るが、同じことはできる。

次のような台詞を言いながら始める。「次は、どなたかに単に1枚のカードを思い浮かべていただくだけにします」目的を説明し、選択の幅を示すために、手の上でカードを表向きにスプレッドする。「ジョーカーは考えないで下さい。これはカードには含みません。抜いておきましょうか。そうすれば気にならないでしょうから」カードをスプレッドしていき、ジョーカーが出てくるごとにそれらをアウトジョグしていく。



続きは書籍でお楽しみください

<http://www.script-m.jp/note/cardcollege5.php>